

学位請求論文（課程博士）審査報告書

氏名・（本籍地） 高田 彩（広島県）
学位の種類 博士（文学）
学位記の番号 甲第134号
学位授与の日付 令和4年3月15日
学位論文題目 宗教集団の運営に関する宗教社会学的研究—武州御嶽山を事例として—
論文審査委員 主査 村上 興匡
副査 寺田 喜朗
副査 弓山 達也
副査 黒崎 浩行

論文の内容の要旨（1200字以上）

本論文では、宗教集団を様々な担い手によって構成される経営体として捉え、各担い手がどのような役割を持ち、その担い手同士がどのように関連しながら、宗教集団を運営しているのかを明らかにすることを目指した。特に、宗教活動には直接的に関与しない担い手が行う仕事や、その役割に注目し、彼ら、彼女らの存在が、宗教集団のなかでどのような意義を持つのか解明することを試みた。この研究目的を達成するため、本論文では、東京都青梅市に存する武州御嶽山をフィールドとし、武州御嶽山の山上集落や宿坊で働く人々について調査研究を行った。

本論文の構成としては、序論をはじめ、第Ⅰ部として「第1章 武州御嶽山の組織と運営」「第2章 御師の活動と宿坊の経営形態」、第Ⅱ部として「第3章 武州御嶽山の観光化の過程—明治末期から昭和戦前期—」「第4章 武州御嶽山の観光化の過程—昭和戦前期から平成初期—」「第5章 武州御嶽山の観光化の過程—平成初期から平成中期—」、第Ⅲ部として「第6章 宿坊運営における従業員の役割」「第7章 宿坊運営における御師の妻の役割」「第8章 御嶽山における御師の妻の位置付け」、終章の三部構成全10章で成り立っている。

本論文では、①宿坊でのアルバイトや山内の清掃活動への参加をはじめとする参与観察型調査、②武州御嶽山の関係者に対する聞き取り調査、③文献調査の三つの方法によって、山上集落や宿坊で働く人々に関するデータや、明治から平成にかけての武州御嶽山を取り巻く社会状況についてのデータの収集を行い、観光という視点から武州御嶽山の山上集落や宿坊、武蔵御嶽神社が、どのような担い手によって運営されていたのか通史的に考察するとともに、武州御嶽山の明治から平成に至るまでの山内での取り組みや山外の状況によって、武州御嶽山の宿坊に労働力を提供する人々の労働実態と役割がどのように変化したのかが検討された。

序論では、①宗教集団に関する研究、②シャドウ・ワークに関する研究、③都市祭礼における運営組織に関する研究、④武州御嶽山に関する研究について先行研究の整理が行われる。まず森岡清美の宗教集団論を参照し、宗教活動を行うための集団には、理念的イデオロギー要素（教義）、慣行的行為様式の要素（様式・行事）、人的組織的要素（構成員）、物的道具的要素（財政・施設）が必要であること、宗教集団には超俗（聖）と世俗の二面があり、超俗は世俗を背負って成立することを指摘した。さらにイリイチの「シャドウ・ワーク」の概念を援用し、宗教集団におけるシャドウ・ワークの一例として御師の家族の働きに着目した。さらには東京都中央区佃・月島の住吉神社大祭を事例とした有末賢の研究から、都市祭礼の運営組織の重層的構造、内部構造と外部構造の複合的な力によって支えられているとの見方を御嶽山にも援用している。武州御嶽山の歴史については齋藤典男の研究や、武州御嶽山の内部で働く人々について検討した西海賢二の研究などが参照された。

第Ⅰ部では、武州御嶽山には、山上に居住する山上御師と、山麓に居住する坂本御師の二種類の御師が存在することが示された。山上の武蔵御嶽神社は、山上御師と坂本御師の合議制で運営されていること、御師が行ってきた配札活動と宿坊など、武州御嶽山を構成する組織や、御師の仕事内容などの基本的な情報を提示された。

第Ⅱ部では、武州御嶽山の観光化の過程が論じられた。武州御嶽山の山上集落や宿坊、武蔵御嶽神社が、どのような担い手によって運営されていたのか、観光という視点から検討が行われる。

「明治末期から昭和戦前期」「昭和戦後期から平成初期」「平成初期から平成中期」の三期に分けて考察がなされた。

「明治末期から大正」では、山内関係者による案内記の発行や、青梅鉄道によるチラシ、パンフレットの発行が行われ、避暑、官吏の受験勉強、学生の勉学・修学旅行へ最適の地として宣伝されるようになる過程が記述された。大正から昭和初期では、御師家により旅館が開業され、講員を受け入れる宿坊に、併存する形で旅館としての機能が追加され、それ以外の一般客である「都市の未知の人たち」に対する対応を行うようになり、従来の御師としての職務に接客業の要素が加わった時期であった。「昭和戦後期から平成初期」では、昭和30年代に青梅線が行楽路線として発達し、講社利用者が減少傾向である一方、林間学校や教員研修の受け入れがはじまった。昭和40～50年代になると経済成長の影響から、一部の講社による盛大な代参、講碑の建立が行われるようになり、宿坊の増改築がおこなわれて数人、多くて十数人の小グループから団体客の対応へ転換。昭和戦後期の武州御嶽山は、全体的には減少傾向にあった講に代わって、学校関連の固定客と、経済力のある一部の講によって、神社や宿坊の運営が維持されていた。「平成初期から平成中期」としては、平成10年代から表面化した講社講員の減少による山内経済の低迷を好転させるため、山上集落と武蔵御嶽神社では、新規の「一般参詣者」の獲得を目指し、滝行体験や神楽の一般公開など、これまでやって来なかった取り組みに着手するようになった。その一環として、「おいぬさま」活性化事業が推進され、ペット同伴で参詣できる神社として参詣者の数が増加した。

武州御嶽山は明治末期から平成中期のどの時代においても、信仰（聖）と行楽（俗）の両面を持っており、御嶽山の人々は、場面や相手によってどの側面を前に出すのかを戦略的に取捨選択していた。武州御嶽山にとっての観光化は、武蔵御嶽神社を中心として構成される山上集落全体を存続させようとする工夫の一つと解釈可能と結論づけた。

第Ⅲ部では、武州御嶽山の明治末期から平成中期に至るまでの山内での取り組みと、山外の状況によって、武州御嶽山の宿坊に労働力を提供する人々の労働実態や役割がどのように変化したのか論じられた。武州御嶽山の山上集落には、御師以外にも、山内運営を支える担い手が存在していることが記述された。

特に、宿坊で働く女性の山外労働者（「お手伝いさん」、「アルバイト」）と、御師の妻（「奥様」「おかみ」）に注目している。昭和30～40年代を境として、宿坊で働く女性の山外労働者は、「お手伝いさん」から「アルバイト」へ、御師の妻は、「奥様」から「おかみ」へと呼称が変化している。昭和30～40年代の武州御嶽山は、交通網の発達、林間学校、研修会などの団体客の増加、宿坊稼働の長期化により、御師の妻の業務が拡大した。またこの頃、交通網の発達と通勤圏、通学圏の拡大、青梅市の工業化などによって、山麓住民の就労先、進学先の選択肢が増加し、宿坊で働く女性たちの労働の動機や意義が変化した。宿坊でのアルバイトは、現在、自己実現や自己充足につながる体験として認識されている。宿坊で御師家とアルバイトの女性たちが形成するつながりは、ただの雇用主と労働者の関係に止まらない、アルバイトの女性たちにとって一種の共同体の帰属のような機能をも備えていることが指摘された。

武州御嶽山の御師家に嫁いできた女性は、「若嫁」→「なかばあさん」→「おばあさん」というライフコースを辿る。御師の妻たちは、関与する山内の社会組織、「婦人部」「組合」「付き合い」などに所属する中で経験を積んでゆく。嫁いできて間もない「若嫁」は、家同士の互助に重点を置く組合、付き合いにおいて山内慣習などの教育を受けた後、神社の清掃や祭礼への補助を通して、神社運営に関わる婦人部に入り、自身の宿坊や、山内組織を牽引していく役割を果たす「なかばあさん」になる。武州御嶽山にとって、「なかばあさん」は、御師家の女性の代表。御師家が運営する宿坊および山内組織において主力の働き手とみなされている。彼女たちの労働力によっても、武州御嶽山という経営体が支えられていることが明らかにされた。

終章では、結論として、①武州御嶽山の山上集落が持つ重層的構造、②宗教集団の構造とその担い手とそのシャドウ・ワークによって、重層的構造が成立、維持されるしくみが論じられた。武州御嶽山の宿坊は、山外からの労働者を絶えず取り入れることで運営されてきた。この外部の人々を入れながら組織を運営していくという部分は、都市における祭礼の運営組織と共通する。

昭和30～40年代を境として、武蔵御嶽神社の運営組織と担い手が変化する。昭和30年代には宮司と本務員、それ以外の御師による二重構造で運営されていたが、昭和30年代以降、第1グループの御師と、第2グループの御師からなる二重の内部構造と、その外円に位置する第3グループの御師の妻の重層的構造を持つ運営組織に変化する。担い手も、昭和30年代以降、御師とその家族で構成されていた内部構造のうち、御師の家族が担う範囲が増大していく。御師の妻の役割負

担が増加することとなった。武州御嶽山の宿坊は、運営組織の構造を、内部構造と外部構造からなる重層的構造から、二重の内部構造と外部構造の重層的構造を持つ組織へと変容させたことで、昭和30年代以降の社会変動に対応し、その機能を存続させてきたことが明らかにされた。

宗教集団は、宗教活動を行うための集団であるが、御師の妻は、神社で執行される儀礼において、衣装の着付けや、食事の世話、来賓の接待、準備や片付けなどを行うとともに、神社や山内の公共空間の清掃および備品の管理を行い、武州御嶽山という宗教空間を間接的に支えている。このような仕事を「宗教的シャドウ・ワーク」と呼ぶことができる。戦前の鉄道網の発達をはじめとするインフラの整備、林間学校や教員研修の利用、さらに青梅地域の産業化、工業化などの社会の側の変化に対し、武州御嶽山は、従来の講社講員以外の参詣者を受け入れる観光化によって、構造内の担い手の役割や仕事内容を変化させることで、運営組織の重層的構造の崩壊を防いだことが指摘された。

最終的に結論として、外部構造が担う世俗の領域と、内部構造が担う超俗の領域を架橋する場面で大きな力を発揮したのが、御師の妻であった。外部構造が縮小すると、それに伴って内部構造も縮小する。現在の武州御嶽山は、経営体としては、縮小傾向にあるが、円を小さくしながらも、内部構造と外部構造を保ったままであれば、宗教集団の機能は保持されるのではないかとの見解が示された。

審査結果の要旨として、口述試問において議論された、いくつかのポイントについて示す。

① 従来の山岳修験集落研究の継承と発展

本論文は、斉藤、西海などの先行研究（歴史的研究）を継承した上で、筆者が自ら行った資料調査、フィールドワークにうまく接続することに成功している。明治以降、多くの山岳修験聖地は寂れてしまったものが多く、現在でも信者を多く集める武州御嶽山は特殊な修験集落である。寂れてしまった他の修験集落と比較して、どんなメカニズムで生き残ったのか、一通り明らかにできている。山岳修験集落の歴史を、明治から平成まで筋が通った形で押さえた本論文は、山岳修験研究としては類例のないものと評価できる。

武州御嶽山の特殊性として、江戸の中期頃から御師が神職となったことで、御師達の裁量権が強く、御師自ら山上集落を運営し守る伝統があることを示した。そうした前提の上で、明治から平成にかけての観光化の過程が手堅くつまびらかにされている。特に、交通の発達、国立公園になったことで結果的に外資本ホテルの参入が阻止されたことなど、社会の側の変化により宿坊の性格が変わった過程がうまく描かれている。特に平成の観光化では、配札・宿坊からペットとともに神社に参拝するなど、信仰へのアクセスの形が変わり、従来とは異なった回路からの聖地のブランディング化がはかられた事例は興味深い。

その一方で、本論文は戦略的に女性の側からの視点が活用されているが、従来の男性側から見た研究との接続が相対的に弱くなっていることは否めない。一例を挙げると、武蔵御嶽集落の宿坊間の階層性について言及がない。宿泊収容数を見ると、明らかに経営規模には大きな差がある（3倍以上）が、その違いを「奥様」「おかみさん」の分析に取り入れることで、より詳細な分析が可能となったと考える。

② 聖俗論—宗教の何が判ったのか—

本論文の大きな特徴の一つは、武州御嶽山の観光化に注目することで、信仰と観光、言い換えると聖と俗との関係を明らかにしたことである。宗教団体の二重組織構造（内部：信仰、外部：世俗）の視点をを用いることによって、明治から平成にかけての武州御嶽山の宗教組織的变化の概要を捉え、宗教学的な分析考察を行うことに成功している。

両者が「相互依存的に併存」（p.119）しているとの結論は、それ自体に異議はなかったが、相互依存的とは、筆者も指摘（p.129）しているように、もはや成り立たない二項対立が前提とされてしまっているのではないかと、との指摘があった。筆者の意を汲めば、むしろ俗を孕んだ聖性のあり方自体に分析を向かわせることにより、二分法を越えた聖のありよう（「宗教」それ自体）に迫ることもできたと考えられる。

③ 「お手伝いさん」「アルバイト」からみる御嶽山という視点

本論文のもう一つの特徴は、裏方からみる御嶽山（その信仰と組織）である。宗教的シャドウ・ワークという概念を用いて切り込む手法は高く評価された。その一方で、そして特に6章は自らもアルバイトとして参与した体験がいかせる（問われる）重要な章であるが、十分に活かし切れていないことが指摘された。6章の結論は彼女たちが働く意義は「余暇の有効活用や社会参加など、賃金を得ること以外の意味」（p.94）を得たに留まっている。終章での総括は「自己実現」「自己充足」「一種の共同体の帰属のような機能」（pp.121-122）と、一歩進んだ分析が行われているが、（所々で対比される）コンビニのバイトとは違う彼女たちの労働とその意義（つまり自己実現・充足、共同体の宗教的機能）など、教義とは異なる宗教性（イデオロギー）を見出し分析することも可能はなかったかとの指摘があった。

④ 「奥様」「おかみ」研究

7章・8章では御師妻の「奥様」時代から「おかみ」時代への役割変遷、ライフコース、社会組織についての分析が展開される。これを聞き取り調査だけで解明するには相当な労力を要したことが推察できる。彼女たちのもてなしから宿坊統括者への役割変遷（p.104）、さらには「中間管理職」（p.114）としての役割の増大を明らかにすることに成功している。〈御師＝宗教者＝組織の中心〉に対する〈妻＝非宗教者＝裏方・下支え〉といった図式から、妻たちが交渉権を持ち（宮司から旅行権を勝ち取ったエピソード（p.110）が示すように）、独自の自治組織を有し、バイトを嫁として紹介、その後、若嫁、なかばあさん、おばあさんという階梯を迎えることを明らかにしたのは大きな成果である。

ただ終章になると、こうした「奥様」「おかみ」の御嶽山の女性史が、宗教活動（①イデオロギー、②行為、③人、④モノ）のうち②と④を間接的に支えるといった限定的、補完的な評価となっている（p.123）。「奥様」「おかみ」の育む①イデオロギーや③組織性に目配りすることにより、7・8章の成果をより明確にできたのではないかと指摘があった。

自ら長期にわたって宿坊のアルバイトとして参与観察をしていた体験が直接綴られていないこ

